
世界の大規模災害と健康問題

(國井 修、國井 修・編：災害時の公衆衛生、東京、南山堂、2012、8-20)

2015年1月16日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

1980年代には年間100件ほどであった自然災害の件数は、約20年間で約5倍に増え、被災者の数も年間2億人を超えた。一方で自然災害による死者・行方不明者数は減少傾向にある。これは、様々な対策が効を奏してきたためだと考えられる。しかし未だに災害発生時の社会的損失は甚大である。その中でも、今回は災害に起因する健康問題について考えていきたい。

・災害に伴う健康問題

災害による健康問題は多種多様である。最悪のものは死亡であり、災害による直接死亡と間接死亡(災害関連死)に分けられる。死亡者は、子供、女性、高齢者、障害者などに多い。災害の種類により健康影響は大きく異なる。日本に多い地震では、挫滅創、切創、骨折などの外傷、救出後のクラッシュ症候群が多く見られる。火山噴火では広範囲熱傷、気道熱傷、火山灰吸入による呼吸障害、噴石の命中による外傷などがある。また、同じ災害でも発生場所や発生時期により健康影響が異なる事がある。東日本大震災では、津波に巻き込まれて助かっても、寒い環境下で救助が遅れたために低体温症で死亡した方も多かった。一方で、熱帯地方での地震や津波ではむしろ熱中症や脱水、熱帯病の流行などが問題となる。避難生活の環境も健康影響を左右する。地震などの際、車中で避難生活を送る人達の中では深部静脈塞栓症が問題となった。また、車中での避難生活は精神的・肉体的ストレスによる心筋梗塞・脳梗塞の発症、排気ガス中の一酸化炭素吸入による血栓症の発症などのリスクも高めるとされている。災害による健康影響は、身体だけでなく精神、心理にも及ぶ。阪神淡路大震災では、被災者の約10%に抑うつ、不安状態、睡眠障害、アルコールやたばこの増加といった変化がみられた。世界中で大規模災害後の精神症状についての研究がなされている。PTSDの発症は災害に直接巻き込まれた被災者で30~40%、被災者の救助にあたったもので10~20%と報告されている。

・災害と感染症

災害の後には感染症が流行すると考えている人は多い。しかし、1970年以降に世界で発生した洪水災害の後、実際に感染症が流行したのは全体の1割程度であった。だが、発展途上国では上下水道の整備不足、劣悪な衛生環境のために感染症流行のリスクは高くなる。通常、災害発生後に流行する感染症は、以前からその地域で頻発している事が多いが、全く別の感染症が流行することもある。ハイチ地震後に流行したコレラである。コレラは災害援助にきたPKO部隊が持ち込んだと考えられている。また災害後には、動物を介した感染症も流行する。ネズミなどの齧歯類によるレプトスピラ症、蚊によるマラリア、デング熱などである。災害後に必ずしも感染症が発生する訳ではないが、一度発生すると健康被害が急速に拡大しうる。そのため、地域のリスクを分析し、迅速に対策を行う必要がある。